

ヒグマWGの議論経緯のまとめ(2010-2024)

資料3（別紙）

会議名	年度	回	開催日時	議事次第	議事概要	計画等	主なトピック
ヒグマ保護管理方針検討会議	2010年度 (H22)	第1回	2010/6/20		知床世界自然遺産地域におけるヒグマ保護管理方針策定のため、検討会議が設置。座長は松田裕之氏。 目的: 知床世界自然遺産地域において、ヒグマの健全な個体群を保全し、人間との軋轢を解消するための保護管理方針を策定する。 現状認識: 知床のヒグマの個体群は世界的に見ても高密度で微増傾向にあり、人身事故や農漁業被害といった人間との軋轢が深刻な課題となっている。 対策の方向性: ヒグマ個体群の管理だけでなく、ゴミ管理や利用者の行動制限といった「人間の行動管理」の必要性が共有された。ただし、その表現や強制力については慎重な議論が必要。 今後の進め方: 管理の対象範囲を斜里・羅臼・標津の3町とすること、また方針の策定にあたっては地域住民との合意形成を重視し、分かりやすさを優先する方向で検討を進めることで合意された。	知床半島ヒグマ保護管理方針（案）	
		第2回	2010/11/9	(1)ヒグマの管理体制のあり方と管理上の課題 (2) 知床半島ヒグマ保護管理方針(素案)の作成 (3)ヒグマ個体群モニタリング調査(案) (4) その他	方針の名称と対象区域: 方針名は「知床半島ヒグマ保護管理方針」とし、対象区域は斜里町、羅臼町、標津町の3町とすることで合意された。 基本理念の明確化: 世界で最も高密度に生息するヒグマ個体群の一つを、将来にわたって安定的に維持することを基本理念として明確に打ち出すことを確認。 ゾーニング案の議論: ゾーニング案(A、B、C案)が提示され、ヒグマの行動段階を基準としたB案が分かりやすいとの見解が示された。 管理目標の3本柱: 「個体群の維持」「人身事故の回避」「社会・経済的被害の軽減」を管理の3本柱とすることで合意した。ただし、具体的な数値目標の設定は今後の課題とされた。 人間の行動管理の重要性: 軋轢を減らすためには、ゴミ処理や誘引物の管理といった「人間の行動管理」が不可欠であることが改めて強調され、方針への明記が検討された。		・2006年から2011年のヒグマ目撃件数は、斜里町では700〜800件前後の高止まりで推移。羅臼町では2007〜2008年は100件前後だったが、その後2011年には初めて200件を超えた。 ・2010年6〜7月 ルサ〜相泊間の道路脇でヒグマが頻繁に目撃。これに見物人が多く集まり、安全誘導などに苦慮する状態が発生した。 ・2010年10月 メスとその子の1才の子グマの2頭が斜里町の中心市街地に出没。 ・2010年6〜7月 北浜、相泊、中番屋地区で番屋付近にあった漁獲物や資材を荒らす事件が発生。 ・2009〜2010年に、環境省生物多様性保全推進支援事業交付金に基づき、「知床海と森の生物多様性保全協議会」からの資金的支援を受けてルシヤ地区における調査と幌別・岩尾別地区におけるGPS標識の追跡調査を実施(知床財団)。
		第3回	2011/1/24	(1) 知床半島ヒグマ保護管理方針(案)の作成 (2) モニタリング調査について (3) 平成23年度以降の進め方について (4) その他	方針案の文言調整: 「共存」という言葉の定義が議論の中心となった。放置ではなく、人間側が積極的に関与・管理していく「マネジメント」の概念であることを明確にした上で、この言葉を使用する方針が確認された。 管理目標の具体化: メスグマの年間の人為的死亡数に上限を設けるといった具体的な数値目標を導入し、管理の実効性を高めることが議論された。メスヒグマの年齢基準は「5歳以上」とし、捕獲上限を5年間で30頭以下とすることで合意。 モニタリング: モニタリング項目として、住民・利用者意識調査や問題個体の動向把握の必要性が指摘され、観光船からの目撃情報も指標として検討されることとなった。 今後のプロセス: 今回の議論を反映した方針の最終案をとりまとめ、次年度にパブリックコメントを実施し、広く意見を求めた上で方針を策定するスケジュールが確認された。		
	2011年度 (H23)	第1回	2011/8/4	(1) 管理方針の策定にかかるスケジュール (2) 「知床半島ヒグマ保護管理方針(案)」の住民説明会について (3) ヒグマに関する住民の意識調査アンケートについて (4) 「中長期的な管理のあり方」について (5) その他	方針策定スケジュールの確認: 「知床半島ヒグマ保護管理方針(案)」について、今後住民説明会及びパブリックコメントを実施し、年度内に策定を完了させるスケジュールが確認された。 住民への丁寧な説明: 住民説明会では、方針(案)の概要版やプレゼンテーション資料を用いて、分かりやすく説明することの重要性が議論された。住民の理解を得るための工夫が検討された。 住民意識調査の実施: アンケートは管理方針への意見聴取だけではなく、ヒグマに関する住民の意識調査として、10年前の調査結果との比較を目的とすることが確認された。 中長期的管理の議論: 将来のヒグマ管理のあり方について、複数の選択肢と考え方を提示する「将来シナリオ」という手法を用いて、地域社会の合意形成を図っていく必要性が議論された。	知床半島ヒグマ保護管理方針（2012年3月）	・2011-2015 ダイキン工業寄付金による「知床の人とヒグマの共存事業」が開始。同事業は羅臼町への寄付金による「地域住民とヒグマの安全安心・共存プロジェクト」と知床財団への寄付金による「知床半島先端部地区におけるヒグマ個体群の保護管理、及び、羅臼町住民生活圏へ与える影響に関する研究」の2つに分かれており、後者によってルシヤ地区における北大獣医学部と共同の集中的な調査が開始。 ・2011年5月 知床五湖利用調整地区制度開始。人数調整と併せ、ガイド付き利用やレクチャー等が開始。 ・2011年10月 北浜と相泊で番屋の施設を壊す事件が発生した。番屋被害の発生は2012年まで継続した。
		第2回	2012/2/22	(1)ヒグマ保護管理方針検討会議の経過報告 (2) 「知床半島ヒグマ保護管理方針(案)」について (3) 長期モニタリング計画について (4) ヒグマに関する住民の意識調査アンケートについて (5) 今後のヒグマ保護管理方針検討会議について (6) その他	方針案の最終化: 住民説明会やパブリックコメントで得られた意見を反映し、「知床半島ヒグマ保護管理方針」の最終案がとりまとめられた。文言の修正や考え方の整理が行われた。 住民意識調査の結果報告: 住民意識調査アンケート結果が報告され、住民の半数以上がヒグマの増加を感じている一方、現状の管理体制は概ね理解されていることが示された。 長期モニタリング計画の検討: 方針の目標達成度を評価するため、ヒグマの個体数、人身事故や農林水産業被害の状況などを監視する長期モニタリング計画の項目について議論された。 今後の体制と展望: 今後の管理体制として、本校討会議は管理方針策定をもって終了し、地域連絡会議の下部に「知床ヒグマ対策連絡会議(仮称)」を設置することが提案された。		
	2016年度 (H28)	第1回	2016/6/10	(1) 今後の検討スケジュールについて (2) 第1期方針の評価について (3) 第2期方針に向けて特に議論を要する項目 (4) その他	「知床半島ヒグマ保護管理方針」が、策定されて5年を迎えることから改定を行うために設置。科学委員会の戦略的な作業グループとして位置付け、科学委員会および各 WG 等に所属する委員、ヒグマ保護管理に係る有識者及び関係行政機関で構成。座長は愛甲哲也氏。 第1期管理方針の評価: 5つの管理目標のうち、「5歳以上のメスヒグマの人為的死亡を30頭以下」とする目標を含む4つが未達成、または未達成となる可能性が高いと評価された。人身事故ゼロは維持されたが、全体として計画の達成は困難な状況と総括された。 主な課題: 人身事故ゼロは達成されたものの、観光客によるヒグマへの危険な接近行為、市街地へのヒグマの侵入、農地への出没等が課題。特に、人間側へのアプローチの方法が焦点。 結果と今後の方向性: 次期方針では、利用者を分類し、より実効性のある行動管理策を導入すること、餌資源の変動を含めたモニタリング体制を強化すると、そして現状を踏まえた管理目標の再設定が必要であることが確認された。		・2012年 知床で初の大量出没が発生。斜里町における目撃件数は1763件、羅臼町でも387件に達した。両町での捕獲67頭。 ・2012年 ウトロ地区を中心に市街地周辺への出没も相次ぎ、斜里町内のヒグマの人為的死亡は24頭と過去2番目の水準。 ・2012年7〜8月 斜里町公園内で2組の兄弟グマ(推定1歳)が頻繁に出没を繰り返した。これらのヒグマはほとんど人を恐れず頻繁に出没し、その度に観光客やヒグマ撮影目当てのカメラマンが周囲に集まる状況がたびたび発生。 ・2012年8月 斜里町岩尾別で観光客によるヒグマへの餌やり事件発生。報道にも大きく取り上げられる。 ・2014年 0才3頭連れ親子が頻繁に岩尾別台地の道路沿いで目撃され、この親子と考えられるヒグマの目撃情報は43件に上った子を守ろうとして人や車に対して過敏に反応し、威嚇突進を繰り返すため対応に追われた。 ・2014年 幌別台地では別の0才2頭連れ親子も頻繁に目撃され、目撃情報は35件に及んだ。
		第2回	2016/9/15	(1) 今後の検討スケジュールについて (2) 知床半島ヒグマ管理計画(素案)について (3) 背景・目標等(人為的死亡総数等)について (4) 管理の方策(利用者・地域住民に対する対応等)について (5) モニタリング・実施体制について (6) その他	第2期方針の骨子案の議論: 「保護管理方針」から「ヒグマ管理計画」への名称変更が検討され、北海道の計画との整合性が議論。次期管理方針の骨子案が提示され、全体的な方向性について議論。 管理目標の再設定: 第1期方針の目標がほぼ未達成であったことを踏まえ、より現実的で達成可能な目標を設定する必要性が強調された。特に、人為的死亡数の上限値については、科学的根拠に基づいた再検討が求められた。 利用者の行動管理の強化: 観光客やカメラマンによる危険な接近行為が依然として大きな課題であることから、普及啓発の強化に加え、法的拘束力のある対策や、利用者を分類した上でのきめ細かな対応の必要性が議論された。 モニタリングの重要性: ヒグマの個体数や分布、餌資源の状況などを正確に把握するためのモニタリング体制の強化が不可欠であることが確認された。各施策の達成度を評価できるような具体的なモニタリング項目の設定が求められた。		・2013 年10 月 科学委員会による緊急声明「岩尾別川のカメラマンによるヒグマの人なれの危険性について」を発表。 ・2013年3月 「北海道生物の多様性の保全等に関する条例」の制定(北海道)。野生鳥獣への餌付け行為を「指定餌付け行為」に指定して禁止することを規定しており、2014年3月には「指定餌付け行為の指定等に係る事務取扱要領」が策定。2015年に「北海道ヒグマ指定餌付け行為」を指定。 ・2013年 全道を対象とした北海道ヒグマ保護管理計画が策定。 ・2013年 知床斜里町観光協会を中心とした、知床ヒグマエサやり禁止キャンペーンで実行委員会が発足し、「知床ヒグマエサやり禁止キャンペーン」が開始。ポスターの掲示やポストカードの作成、関係者の車輻にステッカーを貼ることなどの活動が大きく展開された。 ・2013年 ヒグマ対策を担う財団職員とウトロ地区の住民がヒグマ問題について意見交換する「クマ端会議」開始。 ・2014年 カメラマン等への対策として岩尾別川での監視員を配置。 ・ヒグマ対策ゴミステーション設置開始。
		第3回	2017/1/19	(1) 5年間の総括及び平成28 年度の出没状況(速報)について (2) 住民説明会の開催結果について (3) 知床半島ヒグマ管理計画(案)について (4) 知床半島ヒグマ管理計画の進め方について (5) その他	5年間の総括: 平成24〜28年度の5年間でヒグマの人為的死亡数は187頭、5歳以上のメスは39頭であり、第1期の捕獲上限目標(5年で30頭)は達成できなかったと総括。 計画(案)の最終確認: 住民説明会等で得られた意見を反映した「知床半島ヒグマ管理計画(案)」について、最終的な文言や構成を修正。 管理目標の合意: 人身事故ゼロの継続を最優先としつつ、メス成獣の捕獲上限数を「5年間で75頭」とする具体的な数値目標が改めて確認され、合意された。 科学的知見と責任概念の整理: 個体群動態や大量出没原因の科学的把握強化が不可欠。計画中の「自己責任」は、個人だけでなく地域社会や他者への影響も含む「責任ある行動」として、本文でより明確に整理する必要性が指摘。 今後の管理体制: 方針を実効的に推進するため、関係機関の役割分担を明確にした「知床半島ヒグマ管理実行計画」を策定し、PDCA サイクルを回していくことが確認された。「エシカル・ヒグマワーキンググループ(仮称)」の設置が決定。		・2015年 2度目の大量出没発生。斜里町における目撃件数は1487件、羅臼町では309件であった。両町での捕獲68頭。 ・2015年7月 幌別橋付近の国道でヒグマが車両に前足をかけて揺らした事例は、写真で撮影され、ニュースで全国的に報道。 ・2015年10月 幌別川での釣り問題顕在化。 ・2015年 自転車・バイク等へを追いかけの事象が繰り返し発生。 ・2015年 フレベの滝遊歩道で過去最多の120件の目撃。閉鎖回数も85回に達した。 ・2015年8月 ミツ峰野営指定地にテントを張ったまま残置して登山を行っていた人のテントがヒグマに破られるという事件が発生。 ・2015-2017 北大野生動物学教室によるルシヤ地区での研究。テーマ: 地球温暖化による食物環境の変化はヒグマの生態にどのような影響を及ぼすのか？(三井物産環境基金) ・2016年 ヒグマ対策技術者育成のための春期捕獲が全道に拡大。 ・2016年 知床博物館主催の特別展「ヒグマ、その過去現在未来」が開催。「第10回北海道の今後のヒグマ研究を考えるワークショップ」を知床博物館で開催した。 ・2016年7月 知床連山地区での至近距離での遭遇が相次いだ。 ・2016年8月 幌別川での釣りのリュックや自転車がヒグマに壊られる事件や釣った魚を奪われる事件が連続的に発生。8月31日に幌別川河口を立入禁止とすることを決定し、9月2日から立入禁止措置を実行。「幌別の釣りを守る会」結成。9月16日に解除。

会議名	年度	回	開催日時	議事次第	議事概要	計画等	主なトピック
エゾシカ・ヒグマワーキンググループ	2017年度 (H29)	第1回	2017/6/20	(1)平成29 年度アクションプランについて (2)モニタリング及び調査・研究について (3)知床半島ヒグマ管理計画の普及・啓発について	ヒグマ管理計画が策定され、これの進捗、モニタリング等を議論する場として、「エゾシカ・ヒグマWG」が発足。座長は宇野裕之氏。 モニタリング体制の検討: 個体数推定や長期トレンド把握のため、DNA分析や自動撮影カメラ調査の重要性が認識されたが、予算的な担保や実施体制の明確化が今後の課題として挙げられた。 人身事故等緊急時対応マニュアルの検討: ヒグマによる人身事故等緊急時の対応マニュアルについて、ヒグマ対策連絡会議で協議が進められる方針が確認。 大量出没時の対応: 過去的大量出没を踏まえ、将来的な大量出没の可能性を考慮し、対応方針や対応方法をアクションプランに具体的に盛り込むべきとの意見が出された。 普及啓発の課題: ヒグマによる危険事例が多い中、利用者にヒグマ対策に関する情報が十分に届いていない現状が指摘され、効果的な情報発信の方策が課題とされた。	知床半島 ヒグマ 管理計画 (2017年4月)	・2017年4月 第二種特定鳥獣管理計画として「北海道ヒグマ管理計画」(第1期)が策定。 ・2017年 斜里町においては31年ぶりとなるヒグマによる負傷事故が発生。ヒグマ駆除中のハンターの負傷。 ・2017年8月 サケ定置網へのヒグマによる食害を確認。 ・2017-2018 北大野生動物学教室によるルシヤ地区での研究。テーマ:知床国立公園とその周辺におけるヒグマと人の共存の道を探る調査研究(富士ファイル・グリーンファンド)
		第2回	2017/11/27	(1) 平成29年度ヒグマ管理対策状況について(速報) (2) モニタリング及び調査・研究について (3) 長期モニタリング計画の見直しについて(ヒグマ関係) (4) 平成30年度アクションプランについて (5) その他	人身・経済被害および危険事例の状況: 2017年は大量出没年であった過去の年に次ぐ捕獲数に達しており、人とヒグマの軋轢が増加していることが報告された。 モニタリング手法の課題: 個体数推定の精度向上に向け、国立環境研究所の専門家との協力体制が検討された。 評価項目の見直し: ヒグマ管理計画のモニタリング項目と長期モニタリング計画の項目整理が課題とされ、「公園利用者に起因する捕獲数」の表現修正や、問題個体数の評価指標への採用などが議論。 地域住民・利用者の意識啓発: 住民説明会が開催され、管理計画の説明やヒグマ対応策に関する質疑応答が行われた。外国人観光客に対する普及啓発の強化も課題として認識された。		
	2018年度 (H30)	第1回	2018/5/24	(1) 2017(平成29)年度アクションプラン実施結果について (2) 2018(平成30)年度アクションプランについて (3) モニタリング及び調査・研究について (4) 長期モニタリング計画の見直しについて(ヒグマ関係) (5) その他	アクションプランの実施状況: 2017年度は、ヒグマによる人身・経済被害、危険事例の発生件数が増加し、特に特定管理地での出没が目立ったと報告された。 利用調整の推進: 知床五湖やカムイワッカでのアクセスコントロール、特にシャトルバス導入やカーフリープロジェクトの推進が引き続き議論された。ネガティブな「規制」ではなく、自然体験の質の向上というポジティブな側面を打ち出すことで、利用転換を促す方向性が模索された。 個体数推定の重要性: メスヒグマの人為的死亡総数目標の根拠を明確にするため、個体数推定の精度向上に向けた調査の継続が必須であると再確認された。 長期モニタリング計画の見直し: ヒグマの餌となる堅果類の豊凶モニタリングの追加が提案された。ヒグマ管理計画の目標達成状況が可視化されたことは評価されたが、目標値超過の理由分析とフィードバックの必要性が指摘された。 課題解決に向けた体制強化の模索: ヒグマ対策連絡会議の役割や、地域住民・事業者の問題行動への対応(罰則付き指導の必要性)について議論されたが、現状の体制と予算では限界があることが示唆された。		・ヒグマが飼い犬を殺傷するという事件が、2018年に1件(犬2匹死亡)、2019年3件(犬3匹死亡)、2021年に1件(1匹死亡、2匹負傷)と羅臼町で続発。 ・2018年 0才の子を連れてメス成獣へ北海道では初めてカメラ付きGPS標識を装着。 ・2018年 岩尾別地区の施設に侵入し、ゴミを摂食したヒグマが有害捕獲。捕獲されたヒグマの子の取り扱いについて議論。
		第2回	2018/11/19	(1) 管理計画のモニタリング及び調査・研究について (2) 長期モニタリング計画の見直しについて(ヒグマ関係) (3) 2018(平成30)年度アクションプラン実施状況(速報)及び2019(平成31)年度アクションプラン等について (4) その他	人との軋轢の高止まり: 2018年度もヒグマの出没件数や対応件数は高止まりの状態であり、特に羅臼側での市街地侵入や漁業関連の危険事例が多発したと報告された。 問題行動対策の強化: 問題行動をとる人間への強制力を持った対応の必要性が認識され、自然公園法の改正等による法的な担保への期待が示唆された。地域住民への働きかけを強化し、意識向上を促すことが重要とされた。 社会実験の推進: 岩尾別における社会実験(シャトルバス導入等)の素案が示され、ヒグマとの軋轢軽減と利用者の安全確保、質の高い自然体験提供を目指す方向性が確認された。 当歳グマの取り扱い: 人慣れた当歳グマの出現とその取り扱い(飼養の是非)について議論され、環境省は世界遺産地域での飼養は適切ではないとの見解を示した。問題グマを発生させないための普及啓発や、関係機関が責任を持って対策に取り組む必要性が訴えられた。		
	2019年度 (R1)	第1回	2019/6/26	(1) 2018(平成30)年度アクションプラン実施結果について (2) 2018(令和元)年度アクションプランについて (3) モニタリング及び調査・研究について (4)その他	人との軋轢の現状: 2018年度のアクションプラン実施結果が報告され、引き続きヒグマによる人身・経済被害や危険事例が発生していることが示された。特に羅臼町では市街地出没が多く、電気柵の維持管理や住民意識の向上が課題とされた。 アクセスコントロールの進捗: 岩尾別地区でのシャトルバス導入を目的とした社会実験は難航したもの、小型電気自動車の活用など、新たな交通転換策が提案された。地域住民や観光関係者からは、シャトルバスへの乗り換えの必要性について一定の理解が得られつつあると報告された。 モニタリングの継続と体制強化: 個体数把握のためのカメラトラップや糞カウント調査の継続が重要であると再確認された。これらの調査の継続には相当の労力が必要であり、5年間の計画期間終了後の持続的な体制構築が必要との指摘。 管理計画目標の達成状況と課題: ヒグマ管理計画の目標達成状況が報告され、特に農業被害や漁業関連の危険事例の目標達成が困難な現状が示された。予防策の継続や、問題行動をとる人間への対策の強化が求められた。		・2019年8月 札幌市南区の住宅街に連日ヒグマが出没して大ニュースとなるなど全道的にヒグマ出没が多発。 ・2019年4月に斜里町で再び狩猟者の事故が発生。 ・2019年 羅臼岳登山道で登山ガイドがヒグマに追跡されてクマ撃退スプレーで撃退する事件が発生した。 ・2019～2021年 環境研究総合推進費による研究「遺産価値向上に向けた知床半島における大型哺乳類の保全管理手法の開発」を実施。研究テーマ1「ヒグマ個体群の新規個体数推定法の開発」。研究テーマ2「海と陸の物質循環に寄与するヒグマとサケ・マス類へヒグマ大量出没の要因解明」など。 ・羅臼町での住民参加型の草刈り開始。「クマ端会議」開始。
		第2回	2019/12/23	(1) 知床半島ヒグマ管理計画の進捗状況(速報) (2) 知床ヒグマ対策連絡会議の対応状況 (3) ヒグマの適正管理に必要な調査・研究の実施状況 (4) その他	軋轢の悪化と定義の明確化: 危険事例の発生件数が目標の半減どころか増加したことが報告され、危険事例の定義や線引きを明確にすることがめられた。羅臼町では電気柵の維持管理の困難さや、住民意識の向上が課題として再認識。 アクセスコントロールの必要性: 幇別・岩尾別地区における道路沿いでの軋轢の拡大を受けて、シャトルバスへの乗り換えの拡大がスピード感をもって推進されるべきという認識が共有。単なる規制ではなく、質の高い自然体験の提供という視点での利用転換が重要とされた。 モニタリングと個体数推定の進捗: 個体数推定の精度向上に向けた取り組みが継続されており、糞DNA分析や自動撮影カメラを用いた広域トレンド調査の結果が報告。 管理における課題認識の共有: 米国の国立公園の事例を参考に、知床でも人馴れによる危険な状況への移行が懸念され、早急な対策の必要性が指摘された。当歳グマの飼養の是非を巡る議論では、問題グマを発生させないための人間側への普及啓発の重要性が改めて強調された。		
	2020年度 (R2)	第1回	2020/7/28	(1) 知床半島ヒグマ管理計画の進捗状況について (2) 知床ヒグマ対策連絡会議等の対応状況について (3) ヒグマの適正管理に必要な調査・研究の実施状況について (4)長期モニタリング計画のモニタリング項目の評価について(ヒグマ関係) (5)その他	ヒグマ管理計画の目標達成状況と課題: 知床半島ヒグマ管理計画の目標達成状況が報告され、特に人身・経済被害や危険事例の目標達成が困難な現状が指摘された。地域住民や観光客の意識調査の継続が重要課題とされたが、新型コロナウイルスの影響もあり、数値目標設定には無理があるとの見解も示された。 人側行動の管理の重要性: ヒグマによる人身事故を回避するためには、クマの行動よりも人間の不適切な行動をコントロールすることが最も重要であるという認識が改めて強調された。 カーフリープロジェクトの進捗: 観光客のマイカー利用を抑制し、安全なヒグマ観察の機会を創出する「カーフリープロジェクト」が、地域団体との協議を経て「規制」ではなく「誘客イベント」として試行的に実施される方針が決定された。 広域モニタリングの重要性: ミズナラの堅果の豊凶がヒグマの出没に影響を与えることを踏まえ、広域的なミズナラ結実調査の必要性が提言された。長期的な気候変動の影響を把握するためにも、こうしたモニタリングが不可欠とされた。		・2020年 1才子2頭連れの親子が知床横断道路で真横に停車する車に複数回にわたり威嚇突進したことが確認され、2021年にも知床横断道路で親子グマによる威嚇突進がみられた。 ・2020年 男の溪付近の林内にて、人の荷物を啗えて持ち去ろうとするヒグマが現れた。フレベの滝では人に興味を持って接近してくるヒグマが目撃。 ・2020年7月 同一個体と思われる個体が7月に幌別川河口にて、少なくとも2度釣り人の魚を奪い、その後も人に接近するなどの行動がみられた。幌別川河口周辺への立入の自粛が決定。 ・2020年 知床ディスタンスキャンペーン開始。 ・2020年10月 初の幇別地区からのマイカー規制とシャトルバス運行の社会実験「知床オータムバスデイズ」実施。 ・「北こぶしリゾート」が創業60周年を機に、知床に恩返しをしようとするヒグマとの共存を目指す活動「クマ活」の開始。
		第2回	2020/12/14	(1) 知床半島ヒグマ管理計画の進捗状況(速報) (2) 知床ヒグマ対策連絡会議等の対応状況 (3) ヒグマの適正管理に必要な調査・研究の実施状況 (4) 知床半島ヒグマの管理計画の改訂について (5) その他	ヒグマ管理計画の目標達成状況の検討: 目標の大半の達成が難しい現状が報告された。特に人身・経済被害、危険事例については、普及啓発だけでは限界があることが認識され、より踏み込んだ対策の必要性が議論された。 長期モニタリング計画の評価方針: 評価項目の評価について、各WGが評価した内容を科学委員会が全体をチェックする形で進めることが確認された。ヒグマの餌となる木の実の豊凶モニタリングの重要性も再確認された。 人側行動の管理と法的措置の検討: 自然公園法改正による罰則付き指導への期待が示され、ヒグマへの餌付け行為など、人側の問題行動への法的対処の可能性が議論された。市街地でのヒグマ出没に対する警察との連携の必要性も指摘。 モニタリングと管理方策の整合性: 現行のモニタリングと管理方策が実態に合っているか、特にゾーン3・4におけるヒグマの行動段階1+個体の捕獲方針などについて議論。人身事故回避のために「禁止」といった強い表現を使うべきとの意見あり。 体制・予算の課題と地域連携: 各自治体から、ヒグマ対策における人員・予算の限界が訴えられ、北海道や国からの支援、広域的な連携強化の必要性が強く提言された。振興局がコーディネーターとなるなど、より具体的な役割分担が求められた。		

会議名	年度	回	開催日時	議事次第	議事概要	計画等	主なトピック
エゾシカ・ヒグマワーキンググループ	2021年度 (R3)	第1回	2021/7/1	(1) 知床半島ヒグマ対策連絡会議からの報告 (2) 知床半島ヒグマ管理計画の総括(案) (3) 第2期知床半島ヒグマ管理計画の策定に向けた検討 (4) その他	管理計画の総括と改定の開始: ヒグマ管理計画の改定年であり、現行計画の総括を踏まえ、次期計画の方向性を議論さ。 ヒグマ個体数推定の進展: 環境研究総合推進費による3か年プロジェクトにより、知床半島におけるヒグマの個体数推定が、これまでになく高精度で可能になったと報告された。推定個体数は約400～500頭とされる。 人との軋轢の現状と課題: 水産加工場における残渣誘引や、住民による生ゴミ管理不徹底など、人側が原因となるヒグマの誘引問題が継続的な課題として指摘された。羅臼町では問題個体の出没が増加しており、捕獲技術的な難しさや、市街地での銃器使用のハードルが高い現状が報告された。 管理計画目標の再検討: 目標達成が困難な項目が多いことから、次期計画における目標設定(抽象的な中長期目標と具体的な管理計画期間目標の二層構造)や、普及啓発以外のより踏み込んだ対策の必要性が議論された。	知床半島 ヒグマ 管理計画 (2017年4月)	・2021年 札幌市東区の人口密集地の住宅街にヒグマが現れ、路上にいた男女4人を次々と襲い4人は重軽傷を負った事件発生。また、放牧牛を次々に襲うヒグマ「OSO18」が全国的なニュースとなった。 ・2021年5月 自然公園法改正。第37条に野生動物への餌やり・接近の禁止規定が追加。 ・2022年3月 第二種特定鳥獣管理計画として第2期の北海道ヒグマ管理計画が策定。
		第2回	2021/12/2	(1) 第 2 期知床半島ヒグマ管理計画の策定に向けた検討 (2) ヒグマ個体群のモニタリングの検討 (3) その他	ヒグマ管理計画改定素案の検討: 次期ヒグマ管理計画の改定素案が示され、目標設定のあり方や、ゾーニング、管理方策、普及啓発などのあり方について議論。 個体数推定結果の活用: 推進費による精度の高い個体数推定結果(約400～500頭)が示され、ヒグマ個体群の動向予測と捕獲上限の設定根拠がより明確になることが期待。個体群の維持と社会的な許容水準のバランスが重要な論点となった。 人との軋轢解消に向けた方策の課題: 危険事例の増加が継続する中、普及啓発だけでは限界があることが再確認された。問題行動をとる人間への強制力を持った対応(利用調整地区の設定、法的措置の強化など)の必要性が強く訴えられた。 体制と財源の限界: 各自治体から、ヒグマ対策における人員体制や予算の限界が改めて訴えられ、北海道や国による支援、広域連携の強化、全道計画との整合性確保が求められた。 WGの分離と新体制への移行: 議論が多岐にわたり、会議時間も限られる中で十分な議論ができない状況が続いていたことから、令和3年度末をもって「エゾシカ・ヒグマWG」を「ヒグマWG」と「エゾシカWG」に分離し、それぞれの専門性を高める新体制へ移行することが決定された。		
		第3回	2022/2/15	(1) 第 2 期知床半島ヒグマ管理計画(案)について (2) その他	ヒグマ管理計画の最終調整: 第2期知床半島ヒグマ管理計画の策定に向け、最終的な調整が行われた。 捕獲目標と地域合意の困難さ: 推定個体数に基づいた捕獲目標の議論では、地域からの意見が分かれ、特にゾーン1+の個体の取り扱い(捕獲対象とすべきか否か)について意見が収束しなかった。科学的見地からの助言と地域社会の軋轢のバランスをとることの難しさが示された。 計画と現場の乖離: 各自治体からは、策定される計画と現場の実態(人員・予算の限界、対応の困難さ)との乖離が改めて指摘され、国や北海道の支援、広域的な調整機能の強化が強く求められた。 ヒグマWGへの分離と今後の期待: 令和3年度をもってエゾシカ・ヒグマWGはヒグマWGとエゾシカWGに分離されることが最終確認された。ヒグマ個体数推定の進展は評価されたが、モニタリングの継続性、人間行動の管理、他のWGとの連携など、山積する課題への取り組みが新WGに期待された。		
ヒグマWG	2022年度 (R4)	第1回	2022/8/2-3	(1) 第2期知床半島ヒグマ管理計画の進捗状況について (2) 知床半島ヒグマ管理計画アクションプラン(案)について (3) 長期モニタリング計画について (4) その他	第2期知床半島ヒグマ管理計画の進捗状況: 羅臼町における行動段階1の人なれ個体捕獲の多さや市街地出没件数の高止まりが課題とされた。DNA解析の継続的な予算確保や北海道の主體的な役割が強く求められた。 アクションプランの目標設定: 現場実務者の人数目標(当初10名以上から6名以上への見直し)や、クマ追跡犬の導入・育成の必要性が議論。アクセスコントロールの本格運用への移行や電気柵の維持管理、学校教育を通じた普及啓発の重要性も強調された。 今後のWGのあり方: ヒグマWGの開催頻度については、年2回が適切であるとの意見で一致した。	第2期 知床半島 ヒグマ 管理計画 (2022年4月)	2022年5月 知床横断道路で2オ子2頭連れ親子の子グマ1頭が停車した車両につかまり立ちをし、サイドミラーをかじるなどの問題行動をとった。同一個体とみられる親子による同様の行動が、10月まで継続。 2022年7月 フレベの滝遊歩道でヒグマがしばしば実を食べに来るサクラの木を避けるために、ウトロ灯台管理道路を迂回路として使う試行を実施。
		第2回	2022/12/15	(1) 第2期知床半島ヒグマ管理計画の進捗状況について (2) 知床半島ヒグマ管理計画アクションプラン(案)について (3) 利用者のアクセスコントロールについて (4) 第2期 長期モニタリング計画について (5) 知床世界遺産地域管理計画の見直しについて (6) その他	2022年度ヒグマ管理計画の目標に関する状況: 利用者の問題行動に起因する危険事例や不法投棄の発生が依然として多いことが指摘された。DNA分析の重要性は再確認されたが、2023年度以降の実施が未定であり、北海道の予算確保が難しいことが報告された。 アクションプランの見直し: 現場管理者の育成や特定管理地の目標設定の曖昧さ、箱わな利用の是非などが議論され、再度の修正作業の必要性が示唆された。 利用のコントロール: アクセスコントロールの継続が支持された一方で、輸送力、運営コスト、地域関係者との合意形成といった物理的・経済的・社会的な課題が詳細に報告された。		
	2023年度 (R5)	第1回	2023/8/8	(1) 知床半島ヒグマ管理計画の進捗状況 (2) アクションプランに係る評価検証手法 (3) 遺産管理計画の見直し検討 (4) 長期モニタリング計画・総合評価手法 (5) その他	ヒグマ管理計画の進捗: 危険事例や農業被害の継続が課題とされた。DNA解析から農地被害が地域個体に起因することが示唆され、防除強化が求められた。自然公園法改正後の利用者指導や電気柵の維持管理の課題が議論された。 大量出没の発生: 2023年がメス捕獲数の増加から大量出没年と認識され、個体数増が背景にあると推測された。 アクションプランの評価検証手法: 目標達成に向けた方策の見える化を目指すこととなった。エゾシカ捕獲中のヒグマ事故も報告された。		・2023年 全国的な大量出没年。道内各地で出没が多発した上に、5月には幌加内町の朱鞠内湖で釣り人の男性が、10月には渡島管内福島町の大千軒岳で登山中の男性がヒグマに襲われ死亡し、大きなニュースとなった。 ・知床でもこれまで2回の出没多発年を大きく上回る大量出没が発生。年間目撃件数は2,000件突破し、斜里町でも羅臼町でも捕獲頭数が過去最多を更新した。羅臼町とウトロ地区では市街地にまで多数のヒグマが出現する異常事態。 ・このような世情を反映して、2023年12月、「現代用語の基礎知識選2023ユーキャン新語・流行語大賞」のトップテンに「オソ18・アーバンベア」が選ばれた。 ・2023年4月 森づくりの道開拓小屋コース付近で、ついでこうとするヒグマに地元ガイドがクマスプレーを噴射したが、それでもつきまとうとする事態が発生した。 ・2023年 登山者が羅臼岳登山道でヒグマと至近距離で遭遇し、クマスプレーを噴射する事例が発生。同年、硫黄山登山道でも登山者につきまとうヒグマが報告された。 ・2023年6月 知床岬(羅臼側)のエゾシカの捕獲作業を行っていた作業員が、ヒグマの攻撃を受け軽傷を負った。 ・2023年10月 知床国立公園管理計画を改訂。「自然公園法 37 条第1項第3号に基づき規制される行為」という項目を新たに設け、「野生動物に餌を与えること」、及び「野生動物に著しく接近し、又はつきまとうこと」の具体的な基準を策定。 ・2023年 網走海区漁業調整委員会指示により幌別河口での釣りが規制。「幌別の釣りを守る会」解散。
		第2回	2023/12/8	(1) 設置要綱の改訂について (2) 知床半島ヒグマ管理計画の進捗状況について (3) 次期アクションプラン(案)について (4) 遺産管理計画の見直し検討について (5) その他 ・自然公園法第37 条の数値基準 ・長期モニタリング計画・総合評価手法	大量出没の状況: 2023年がヒグマの大量出没年であり、過去最多の捕獲数(183頭)を記録したことが報告された。その背景には主要餌資源の不足と個体数増加が挙げられた。 管理計画の進捗: 間野委員によるシミュレーション結果に基づき、今後の管理方針として個体群管理の導入が議論された。 アクションプランの評価: 手負い事例の情報共有や「実施の必要なし」の判断基準が課題とされた。自然公園法第37条の運用効果や、居住区域での緊急捕獲における法改正の要望についても検討された。		
	2024年度 (R6)	第1回	2024/8/6	(1) 第2期知床半島ヒグマ管理計画の進捗状況 (2) 知床半島における今後のヒグマ管理の方針について (3) 気候変動に対する順応的管理戦略について (4) その他	大量出没の影響: 2023年の過去最多捕獲(185頭)により、知床半島ヒグマの生息状況が大きく変化したことが報告された。 管理計画の進捗: 利用者の問題行動に起因する危険事例の増加や市街地・農地への出没継続が課題とされた。 今後の管理方針: 間野委員による個体群動態予測が提示され、今後の管理方針として捕獲上限を年間12頭の「目安」とする提案があった。また、広域モニタリングの重要性と予算確保の必要性が強調された。誘引物管理や数刈払い、不適切行動の取り締まりといった人間側の対策強化の重要性も繰り返し指摘された。		
		第2回	2024/12/19	(1) 第2期知床半島ヒグマ管理計画の進捗状況 (2) 知床半島における今後のヒグマ管理の方針について (3) その他	管理計画の進捗: 昨年度的大量出没と過去最多捕獲を受け、ヒグマの管理方針について協議された。松田委員提案のフレームワークに基づき、問題個体対応に加え個体数調整を導入する考え方が示され、合意形成が図られた。 今後の方針: 遺産地域内外での個体数調整の範囲やモニタリングデータの不足、地域の許容限界など、フレームワーク導入に向けた多くの課題が議論された。利用者による危険事例の継続と自然公園法の運用課題、誘引物管理や数刈払いなど人間側の対策強化の必要性も確認された。		